

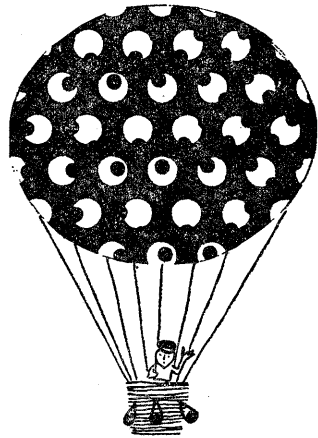
# 犬になった子どもたち

国 吉 栄

以前、友人が、「犬ごっこについて」\*という短い文を発表したことがありました。それまでそのことにほとんど注意を払ったことのなかった私には、その文がとても新鮮に感じられた記憶があります。

ところが昨春、新しい職場に移った私は、思いがけずも、そこで嫌というほど犬になる遊びを見、また私自身そこに参加することになってしまいました。

私どもの園は、四歳児・五歳児あわせて四十数名、そのほとんどが女児という変則的で小さな園ですが、昨春、大きな異動がありました。保育者全員が入れ替わり、私と、新卒



の若い二人の保育者とが跡を引き継ぐことになったのです。

意気込みはあっても、いささか心細い旅立ちでした。こうした私どもにとって、入園式で初めて出会う新入園児とは違い、旧年度中に何度か一緒に過ごした進級組の子どもたちは、親しみもあり、また頼りになる存在でもありました。けれどもこのように緊張して新しい事態を迎えたのは、私ども大人だけではありませんでした。旧年度から持ち上がりの年長児たちにとって、四月からの園生活は、彼らの存在を危くするほどの、全く新しい体験だったのです。

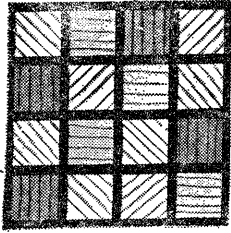
私どもは子どもたちが生き生きと遊ぶ保育をしたいと願っておりましたが、自由に遊ぶ時間が長くあっても、思い思いに遊ぶ新入園児と対照的に、年長の子どもの多くは自分たちで遊ぶよりも大人の傍にいたいことを求めました。長い間、私ども保育者の身体は、年長児をおんぶしたり抱っこしたりでいつもふさがっていました。全く新しい先生。今までと違う保育。中でも子どもたちが特に気にしたのは、座席や並び順が決まっていなかったことでした。それまでは自分の名前が印された椅子で、決められた机に、決められたメンバ―で座ることになっていましたので、これは実に彼らの存在基盤を揺るがすことでもあったのです。こうした中から自然に出てきたのが犬遊びでした。

四月下旬のこと、数人の子どもたちに絵本を読んでいると、一人の女児が手も床につけて、「クンクン、私は犬です」と言いました。「かわいい犬ですね」と言って頭を撫でると、彼女は足元にうずくまりました。絵本を読んでもらっていた子どもたちは足元に割り

込まれて迷惑そうでしたが、私は、「犬なんですって」と言って、絵本を読みながら時々頭を撫でていました。その子はすっかり、おとなしい犬になりきっているのです。

ある日気がつくと、保育室のそここに、犬になって歩いている子どもたちがいます。時々、キャンキャンとかニャアオとか言っています。両手を頭の上にあげて跳びはねている子どももいます。彼らは犬や猫や兎になっているのです。私は一瞬胸をつかまれましたが、これは彼らが自ら始めたほとんど初めての遊びであることを思い、私も四つん這いになって一緒に歩きました。

そのうちに一人の女兒が輪投げの輪と縄跳びのひもを持って来て、「結んで」と言いました。輪にひもを結ぶと首にはめ、「先生持っていて」と、ひものもう一端を差し出します。私がそれを受け取って歩き出しますと、その子は犬になってついてきます。すると何人もが「結んで」と、ひもと輪を持って来て、たちまち何匹もの犬のひもを引いて歩くことになってしまいました。犬になった子どもを手綱で引いて歩くこと、はた目にはワンワン・キャンキャンと賑やかなことですが、大人にとって、本当はともつらいことです。私は自分でその役を引き受けたくなくて、何とか逃げようと思いました。そばにいる子どもに、「この子を散歩させてやって下さい。おとなしい犬ですから」と言っただけで、先生じゃなくちゃダメ」と、犬になった子がひもを引っ張って取りかえします。できるだけ遊びを広げたくてままごとコーナーに連れて行き、「ここでお食事をいただきますよ」と言っても、彼らの関心は相変わらずひもで引かれることにあるのです。ピョンピョ



ン兎になって跳ねていた子どもまで「先生ひもつけて」と言いに来ます。「あら、うさぎは首輪はつけないのよ」、「じゃあ私、犬になりたい」。いつの間にか猫や兎までが首に縄をつけて散歩することになってしまふのです。

こうしたことが、来る日も来る日も続きました。六月初旬から中旬にかけての保育参観の頃、この状態はピークを迎えていました。我が子が首輪をはめられ、ひもで引かれて四つん這いで歩いている姿を、お母様方は何とお思いになるでしょう。私はためらいましたが、けれどもそれがその時の保育の現実でした。私はほとんど泣きたい気持ちで、何匹もの犬のひもを握って保育室を歩きました。

ところが、夏休みを前にしたある日のことでした。私は犬がひもなしで歩いているのを見たのです。「ねえ先生、犬がひも無しで歩いているわよ」。私は感激して同僚に伝えました。子どもたちはとうとう自分の意志で歩く犬になったのです。と同時に、それまで常に何人かが保育者のひぎに乗ったり、背中にながみついていたのに、いつの間にかそういうこともほとんどなくなってしまっていたのです。トンネルを一つくぐり抜けた、という実感がありました。

それ以来、大人にひもを引かせて歩く、犬遊びは全くなりませんが、犬になることは、その後も形を変えてとぎれながらも彼らの卒園まで続きました。二学期になってからは、ままごとの中で子

どもが引いて歩くのを見かけることがありました。また、椅子で作った犬小屋の中にままたごの枕を置いてうずくまり、頭の上に「だれかかかってください」と書いた紙を立てている女児がいました。次にそこを通ると、シーツの上にもう一匹犬が寝ていて、「ふたりいっしょにかかってください」という札が立っていました。誰かこの子たちを引き取ってくれる人がでてくれるように、私は心から祈りました。もう大人が飼うことはできないのです。

犬になること。その意味の重さ。一年たった今、彼らのあの犬遊びは、ただ保育者が変わったから、保育が変わったから、というだけのものではなかったと強く感じます。それがきっかけであったことは確かなのですが、園生活を超えて、犬になることは子どもたちの丸ごとの存在そのものに共鳴するものであったに違いありません。

犬。犬になること。小学校に行ったあの子どもたちは、もう犬になることはできません。今、彼らはそれをどのように表現しているのでしょうか。気にかかります。

(\*) 小宮山雅代 横浜市幼稚園協会鶴見支部

研究集録 昭和56年度 35頁